

浦賀文化

平成30年（2018年）4月1日

第53号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

西叶神社彫刻と後藤利兵衛

江戸時代後期、安房国には安房の三名工と呼ばれた三人の名工がいました。彫工の後藤利兵衛と波の伊八、石工の武田石翁です。浦賀には、二人の名彫工の作品が多数残されています。



西叶神社の拜殿彫刻

私たちの暮らす横須賀市には、多くの文化財が存在する。その件数、内容については『新横須賀市史 別編◇文化遺産』の詳しい解説を見ると、今さらながら驚かされる。横須賀市は文化行政の一環として「市民文化資産」文化財には指定されていないが、市民生活に密着し広く親しまれ、将来も大切に保存すべき文化的価値のある資産」というユニークな制度を設け、私たちの身近に存在する有形・無形の文化財の保護に努めてきた。今回ご紹介する、西叶神社の拝殿を飾る龍の彫刻もその一つである。

三浦半島において、三崎と東西の浦賀は、江戸や上方（関西方面）と海上交通で直接結ばれており、日本各地の文化の影響を受けつつ発展してきた。浦賀は、古代から中世、そして近世、近現代に至るまで、日本の歴史の節目々々重要な役割を果たしてきた。特に江戸期においては、日本の繊維産業を側面から支えていた干鯛問屋の隆盛、首都江戸への入口に位置することから、その防衛拠点として奉行所が置かれてからの船番所の重要な任務、幕末から近現代にかけての商工業の発展など、枚挙にいとまがない。

こうした浦賀の繁栄は、文化の面においても例外ではなかった。先に述べた「市民文化資産」として市民に親しまれ、将来にわたり保護を託された市民文化資産の一つである西叶神社の拝殿彫刻について見ていこう。

◇ ◇ ◇

そもそも西叶神社の淵源は、平安時代の末期にまでさかのぼる。上総国鹿野山で修行をしていた京都守護寺の文覚上人は、平治の乱で敗北した源氏の再興を祈願し、養和元年（一一八一）、対岸の浦賀に京都の石清水八幡

を勧請（勧請）したことに始まるという。そして、源頼朝による鎌倉幕府の樹立という上人の望みが叶ったことから、叶神社と命名したとのことである。

こうした歴史を持つ西叶神社であるが、天保八年（一八三七）に、浦賀の大火により拝殿、本殿ともに焼失してしまった。当時、神社を治めていた第六十八代の法印実如により、天保十三年には三千両もの大金をかけて再建に成功した。このとき、社殿の内外に施された彫刻制作を請け負ったのが後藤利兵衛である。当時の浦賀の豪商たちが、巨富を投じて神社の再建に寄与したという。浦賀経済の実力を彷彿とさせる。

再建は、天保十一年（一八四〇）年）三月から始まり、約二年の歳月をかけて完成した。このとき、利兵衛は二十八歳の若さだった。その費用は四百両以上ともいわれている。利兵衛が請け負った彫刻は、社殿の向拝（正面階段の上に張り出したひさしの部分）や、向拝柱（向拝の屋根を支える左右の柱）などに彫刻された「松に鶴」「梅に鶯」「菊花」「玉取竜」、それに格天井の「二十八熊の竜」などである。この大事業の完成により、利兵衛の名声は一気に高まったという。これらの作品は、今日でも利兵衛の出世作として、また、彼の生涯を通じての最高傑作として評価されている。

利兵衛は、文化十二年（一八一五年）に安房国朝夷郡（現在の南房総市千倉町北朝夷）で生まれた。大工の家に生まれた利兵衛は、幼名を若松と言ひ、幼少のころから身の周りにある大工道具を見て育った。鑿や鉋を自在に扱ひ、文政十一年（一八二八年）、十四歳の頃に彫ったという大黒天立像や寶頭盧尊者立像は、今でも愛宕神社に残っており、波の伊八と異名をとる武士伊八郎信由の作品「波と竜」などととも南房総市の文化財に指定されている。

天保八年（一八三七）年）、二十三歳のときに江戸京橋の彫刻師後藤三次郎恒俊の弟子になり、師匠から「後藤」の苗字をもらい、後藤利兵衛橋義光と名乗っている。

京都や鎌倉でも作品を残した利兵衛は、結婚後は国に戻り、明治三十五年（一九〇二年）、四月二十二日、八十八歳で他界した。墓標は南房総市千倉町寺庭の西養寺にある。

※筆者の推測ではあるが、叶神社の名称は文覚上人の願いが叶ったという、いわば語呂合わせによる命名というよりも、上人が修行に励んだという上総の鹿野山を起源にしているのではないかと推測している。

（芳賀久雄）

〔参考資料〕
・横須賀人物往来 横須賀市生涯学習財団
・新横須賀市史別編・文化遺産 横須賀市
・三浦半島の史跡と伝説 松浦豊著 暁印書館



歴史 語りい座 浦賀奉行所編 その三

郷土史家 山本 詔一



● 干鯛問屋と奉行所 ●

東浦賀に店を構えることが条件で、浦賀の干鯛問屋は魚肥取引の営業権利を得ることができた。村高が六十二石ばかりの小さな東浦賀村にとつて、この干鯛問屋の存在が生命線であった。奉行所の移転先が浦賀に決まり、しかも東浦賀の大半が奉行所関連用地になるといふことは村にとつては死活問題で、だからこそ村をあげて反対運動を繰り広げたのであった。結果、奉行所の関連施設は西浦賀に建設され、「船改め」の業務が始まると浦賀へ入津してくる船が西浦賀へ着船することが多くなり、しだいに西浦賀は活気を帯びてくるようになる。

東浦賀の干鯛問屋は、十七世紀初頭から独占企業に近いかたちで営業し「二万両以上の身諸沢山に有之」と記されるほどであったが、店の既得権が侵されるようなことがたびたびおこり、経営はかならずしも安定しなかった。元禄五年（一六九二年）に上総国勝浦村の市郎左衛門が運上金二百両と灯明堂の維持管理を引き受ける条件を提示し、西浦賀で干鯛問屋を開業することを代官所に申し出た。東浦賀は全村をあげて反対。市郎左衛門が出した条件をすべて受けることで阻止した。この結果は、干鯛問屋の経営を苦しめることとなり、また、浦賀の東西の分村にもつながっていく。

さらに、元禄十年（一六九七年）江戸の三文字屋又左衛門という人物が運上金千両で、干鯛問屋の開業に名乗りを上げた。さすがの干鯛問屋もその運上金の高さに驚き、対抗することはしなかった。しかし、三文字屋は干鯛を扱ったことがなく、すぐに干鯛が入荷しなくなってしまう。干鯛を潤沢に入荷させるには、来年の収穫を見込みその分の代金を先払いして、漁師との関係をよくする「一村買い」という独特の仕入れ方法があった。これが切れれば浜からは裏切り行為とみられ、仕入れもストップする。三文字屋は三年もしないうちに浦賀からの撤退を余儀なくされた。

事態はこれで済まなかった。このことで、浦賀の干鯛問屋の大きな仕入れ先である房総半島の九十九里浜の村々での浦賀問屋の信用は失墜し、代わりに江戸問屋が台頭してくるようになる。浦賀問屋は房総の浜で、江戸問屋と錨取り合ひし、信頼回復を図り復興をめざしている時期に元禄の大地震にみまわれる。さらに、奉行所の移転問題がおこり東浦賀にとつては一難去らないうちにまた一難というのが現状であった。

享保十五年（一七三〇年）になると、商況の悪化は一段と進み、古来からの問屋中に倒産が相次ぐようになる。やむなく東浦賀の商人を新規加入させたが、状況が好転することはない。

このころになると「村中食物に差し支え、衣類もなく、壁も破れ放題、ことに大ヶ谷・新町（現・東浦賀1丁目から2丁目）では一日中戸を閉ざしている」という状況で、港に停泊している船や近郷へ行って物乞いするという哀れさであった。

元文元年（一七三六年）から四年間は、運上金も上納することが出来なかった。干鯛問屋はこの状況を変える手段として、各浦々へ干鯛を生産高に応じて浦賀へ積み送るよう「浦触」をだして欲しいと浦賀奉行所へ嘆願した。この願いは取り上げられなかったが、窮状を見かねた、浦賀奉行一色宮内は勘定奉行所へ嘆願書を送り、善処を要望してくれた。その結果、元文五年（一七四〇年）十月、老中の許可をもらった浦賀奉行は、浦賀の干鯛問屋を保護するため「安房・上総・下総で取揚げられた干鯛を浦賀へも揚げるようにせよ」という「浦触」と「高札」を掲げた。

*浦触：海辺の村々を対象とした御触書

俳句の散歩道

淑気満つ抱一描く亀の絵馬
田島 耕史

ふなをさに御慶を述べて浦渡舟
土部 千恵

笑話一題

今、分館で流行っているもの……それは紅茶です。ただの紅茶ではなく、そこに色々なものを入れていただきます。はちみつ、生姜パウダー、ミルク、砂糖など。これらを好みで入れて飲むのです。私のお気に入りはハチミツと生姜パウダーです。味はもちろんのこと、少し寒い時は生姜で身体もポカポカになりますし、疲れている時はハチミツの甘さが栄養補給になって元気になるように感じます。何より紅茶の香りです。ラックスし、一休みした後は仕事も家事もはかどる（ような気がする……）のです。紅茶の効能についてネットで調べてみれば、出るは、出るはいい事づくめです。皆さんも忙しい日々の中で少しだけ一息入れてお気に入りのものを飲んでリフレッシュしてみたいかがですか。ブレイクした後は心に余裕ができて自分にも他人にも優しくできそうです。

ふゆてん



うら散歩 第2弾

With山城ガール

！のル田 弾族一怒
2ー方し 第浦城し
の三歩 山城の
ガールま 散
まびとす 歩
城し学ん 散
まびとす 歩
山散い睦 散
Withを野 歩
Withを野 歩
山城に宇 歩
歩田城と 歩
散怒山こ 歩
う度史つ 歩
今歴史跡 歩

〈日時〉 5月19日(土) 10:00~13:00
 〈場所〉 浦賀コミュニティセンター1分館
 第4学習室
 〈定員〉 抽選20名
 〈講師〉 山城ガールむつみ(宇野 睦)さん
 〈参加費〉 50円(傷害保険料)
 〈持ち物〉 お弁当、飲み物、敷物、筆記用具
 〈締切〉 5月6日(日)必着

※申し込み方法は、広報よこすか4月号をご覧ください。

